

資料(4)

人間科学部宣言

— 創設10周年に際して —

人間科学部は、久遠の理想をかかげる早稲田大学100周年記念事業の一環として1987年4月に創設され、今日に至っている。科学の研究・教育と人類社会の真の調和を希求するというその創設の理念を踏まえ、過去を厳粛に省みて未来に誠実に対応するため、ここに人間科学部宣言を草して、学部の信念を表明するものである。

1. 人間科学部は、現代が科学技術と実生活との広く深い関わりから成り立っている時代であると認識し、人間科学の研究およびその教育が、同時代の人びとのみならず、未来に生きる人びとに対しても重大な責任をもつ実践であると自覚している。したがって、人間科学部は人間科学の研究とその成果が人類の幸福増進に貢献することを願い、これへの背反は断じて行わないことを宣言する。

2. 人間科学部は、人間科学の研究が人類の幸福に貢献することを願うゆえに、時代の要請を真摯かつ積極的に受けとめ、現実的な対応において、学部の創造性と独自性を発揮することを宣言する。

3. 人間科学部は、生命、生活、生涯の連鎖を自らの実践においてとらえ、学部をあげて協同、共生できる人間環境の創造に邁進することを宣言する。

4. 人間科学部は、人間科学の研究と教育を通して、地域社会から世界へつながり、そこから立ち上がる学問研究への期待を直接的かつ双方向的に吸収する姿勢に積極的な意義を認め、そして実生活における見識が人間科学の研究と教育に有効に機能できる拠点を、そこに確保することを宣言する。

5. 人間科学部は、以上の宣言を日常的に点検し、その成果を研究・教育に誠意をもって活かすことを宣言する。

1997年5月

早稲田大学人間科学部教授会

一般入試現役・浪人比率 (1997年度)

	志 願 者	合 格 者	入 学 者
現 役	2292(44.2%)	345(47.8%)	221(50.8%)
浪 人	2821(54.3%)	372(51.5%)	212(48.7%)
そ の 他	77(1.5%)	5(0.7%)	2(0.5%)
計	5190	722	435

特別選抜 種目別 合格者数

	1987	1988	1989	1990	1991	1992	1993	1994	1995	1996	1997	
バレーボール	3	3	2	2	3	4	4	2	4	5	8	40
ラグビー	3	2	2	4	5	4	4	3	4	3	6	40
陸上競技	3	3	3	4	2	1	3	3	6	6	3	37
ホッケー	2	3	3	2	3	5	4	4	2	2	1	31
ボート	2	2	3	4	3	3	2	3	4	1	1	28
硬式野球	2	2	2	2	0	2	4	3	1	4	4	26
サッカー	2	0	2	3	3	2	2	3	4	1	3	25
ハンドボール	2	1	3	2	2	3	2	3	4	2	1	25
スキー	2	3	1	2	2	2	1	1	1	5	4	24
バスケットボール	1	2	3	1	2	3	2	3	1	1	1	20
アイスホッケー	2	3	1	1	1	1	1	2	4	2	1	19
ヨット	1	1	1	1	3	2	2	3	1	2	2	19
競泳	3	2	2	2	2	2	3	1	0	0	1	18
ウェイトリフティング	1	1	1	1	2	1	3	1	2	2	2	17
レスリング	2	2	1	2	2	1	3	1	2	0	1	17
水球	0	0	1	1	0	2	1	3	2	3	3	16
アメフト	0	0	1	3	1	2	1	3	2	1	1	15
自転車	1	2	2	1	0	1	2	0	2	2	0	13
硬式テニス	1	1	1	1	1	0	2	0	0	3	3	13
バドミントン	0	1	1	1	1	2	1	2	1	1	1	12
ボクシング	1	2	2	0	1	1	1	1	0	1	1	11
柔道	1	2	0	0	1	0	0	2	2	0	0	8
フェンシング	0	1	1	1	0	1	0	1	1	2	0	8
体操競技	0	2	0	0	2	1	0	1	0	0	0	6
卓球	1	1	1	2	0	0	0	0	0	0	0	5
軟式テニス	1	1	1	0	0	2	0	0	0	0	0	5
相撲	0	1	1	0	1	1	0	0	0	0	1	5
飛び込み	0	0	0	1	0	0	1	0	0	0	1	3
スケート	1	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	3
剣道	1	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	3
弓道	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	2
馬術	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	2
合 計	40(4)	44(4)	44(4)	44(4)	44(4)	50(5)	50(5)	50(5)	50(5)	50(5)	50(5)	516(50)
志 願 者 数	67(6)	65(5)	65(10)	63(8)	62(5)	68(6)	70(8)	75(12)	77(14)	81(10)	97(16)	

() は、女子で内数を示す

本学大学院人間科学研究科 進学者数 (1997年度)

	基礎科学科		健康科学科		スポーツ科学科		合計
	男	女	男	女	男	女	
修士課程	4	12	6	8	10	3	43
博士課程	5	2	4	4	1	1	17

就職先業種別一覧 (1995・1996年度)

	基 礎				健 康				ス ポ ー ツ				合計
	男		女		男		女		男		女		
	95	96	95	96	95	96	95	96	95	96	95	96	
卸 売	5	2	3	1	5	5	7	7	5	11	2	4	57
放送・広告	5	5	3	2	2	5	4	5	1	12	5	3	52
運輸・通信	4	4	1	0	1	4	10	5	3	9	3	7	51
保 險 業	3	2	2	2	6	2	9	1	2	9	2	3	43
情報・調査	4	2	4	6	4	0	2	9	4	0	4	1	40
建 設	1	3	1	1	4	1	7	1	3	7	4	3	36
公 務	4	1	1	0	5	4	4	4	0	6	4	1	34
新聞・出版	0	1	3	0	4	3	8	5	1	3	2	2	32
食 品	1	2	1	0	5	3	8	2	1	5	1	0	29
電 気 機 器	1	6	0	1	2	2	4	4	1	6	0	1	28
教 育	1	1	1	1	5	0	3	2	2	5	1	0	22
銀行・信託	1	0	0	2	2	0	9	1	2	3	1	0	21
化 学	1	0	0	0	1	0	5	1	1	3	8	1	21
観光・興業	1	0	0	0	0	0	2	2	2	5	0	7	19
百 貨 店	1	0	1	1	2	0	3	2	3	0	3	2	18
証券・商品	0	0	0	0	0	7	2	0	0	2	3	1	15
他サービス	0	0	0	1	4	0	2	2	1	0	0	3	13
商 社	0	0	0	0	2	0	4	0	2	3	0	2	13
不 動 産	0	0	0	0	2	0	4	0	1	2	1	1	11
その他金融	1	0	1	1	1	1	2	0	0	2	1	0	10
非営利団体	1	0	1	0	1	1	1	2	0	0	2	1	10
その他小売り	1	0	3	0	1	0	1	0	1	1	1	0	9
輸送用機器	0	1	0	1	0	1	3	0	0	0	0	2	8
電気・ガス	0	0	0	0	0	0	2	0	0	4	0	2	8
パルプ・紙	0	1	0	0	1	0	2	0	0	3	0	0	7
木材・製品	1	0	0	0	1	1	1	2	0	1	0	0	7
精密機器	0	0	0	0	1	0	1	1	3	0	0	0	6
一般機器	1	0	1	0	1	0	1	0	0	0	2	0	6
印 刷	1	0	1	0	0	0	2	0	0	1	0	0	5
自動車小売	0	2	0	0	0	1	2	0	0	0	0	0	5
医療・保健	0	0	0	0	2	0	0	1	0	0	1	0	4
飲 食 店	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	3	0	4
相銀・信金	0	0	0	0	0	0	1	1	0	1	1	0	4
その他製造	0	0	0	2	0	0	0	0	2	0	0	0	4
窯業・土石	1	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	3
衣服小売	0	0	0	1	0	0	0	2	0	0	0	0	3
鉄 鋼	0	1	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	3
非鉄金属	0	0	0	0	0	0	1	0	1	1	0	0	3
金属製品	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	2
織 維	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	2
宗 教	0	0	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	2
石炭・石油	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	2
ゴム製品	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1
食料品小売	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1
繊維製品	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1
合 計	41	35	29	23	65	41	122	63	44	110	55	47	675

早稲田大学人間科学部 統計要覧

人的構成

1997年4月1日現在

①教職員数				
教授	69	助手		21
特任教授	1	非常勤		112
助教授	8	専任職員		25
専任講師	5	学生職員		2
兼任教員	13			
②学生数				
	基礎	健康	スポーツ	計
1年次	142(73)	225(145)	262(77)	629(295)
2年次	106(51)	177(106)	248(71)	531(228)
3年次	122(59)	188(108)	283(86)	593(253)
4年次	108(49)	150(92)	279(77)	537(218)
5年次以上	36(13)	29(9)	86(9)	151(31)
合計	514(245)	769(460)	1158(320)	2441(1025)
③卒業生数				
1996年度	541	(9月卒を含む)		
累計	3726			

専任教員 専門分野別 分類

心理学系	発達心理学(基1), 行動療法(基1), 行動学((基3), 認知心理学((基1), 臨床心理学(健3), 環境心理学(健4), スポーツ心理学(ス2), 精神心理学(ス1)
生物学系	遺伝学((基1), 細胞生物学((基1), 微細形態学(基1), 生態学(基1), 神経内分泌学(基1), 分子神経生物学(基1), 生理学(基1:健1), 脳神経薬理(基1), 神経生物学(学1)
社会学系	村落社会(基1), 人口学(基1), 高齢化と福祉(基1), 文化人類学(基1:健1), 考古学(基1:健1), 家族研究(基1), 都市社会学(基1), 社会福祉(健1), 社会開発(健1), スポーツ人類学(ス1), スポーツ社会学(ス1)
語学系	ドイツ語(基2), フランス語(基1), 英語(健4)
工学系	人間工学(健3), 教育工学(健1), スポーツ工学(ス1), 情報処理(ス1)
倫理学系	バイオエシックス(健1)
教育学系	健康教育学(健1)
体育学系	剣道(ス1), バスケットボール(ス1), 柔道(ス1), スキー(ス1), 陸上競技(ス1), 体操競技(ス1), 卓球(ス1), バレーボール(ス1), 水泳(ス1), 舞踏史(ス1), バドミントン(ス1), 野球(ス1), 筋力トレーニング(ス1), 武道(ス1), スポーツ経営学(ス1)
スポーツ方法学系	卓球(ス1), ソフトテニス(ス1), ラグビー(ス1), テニス(ス1), レスリング(ス1)
スポーツ科学系	栄養学(ス1), 衛生学(ス1), 体力医学(ス1), 運動生理学(ス2), スポーツセラピー(ス1), 形態学(ス1), バイオメカニクス(ス1), スポーツ運動学(ス1), 動作研究(ス1)
法学系	スポーツ法学(ス1)

学術活動状況

- ・1995年度 文部省科学研究費採択件数
 - 特別推進研究1(1)
 - 総合研究A(3)
 - 一般研究B(3)、一般研究C(6)
 - 奨励研究A(2)
 - 試験研究B1(2)、試験研究B2(2)
 - 国際学術研究(3)
- ・1995年度 早稲田大学特定課題個人研究(10)
- ・1995年度 早稲田大学特定課題共同研究(4)
- ・早稲田大学特定課題国際共同研究(3)

所沢図書館収蔵資料分類内訳 (単位：冊)

分類	和 書			洋 書		
	95年度数	96年度整理数	96年度数	95年度数	96年度整理数	96年度数
総 記	3,475	312	3,787	893	51	944
哲 学 ・ 心 理	7,407	551	7,958	3,142	556	3,698
歴 史	3,965	403	4,368	715	39	754
社 会 学 科	19,501	1,614	21,115	6,820	1,341	8,161
自 然 学 科	15,623	1,087	16,710	7,030	969	7,999
工 学 ・ 技 術	1,952	202	2,154	596	202	798
産 業	866	108	974	209	47	256
ス ポ ー ツ ・ 芸 術	8,032	498	8,530	3,225	189	3,414
語 学	2,777	53	2,830	1,356	57	1,422
文 学	5,343	301	5,644	748	19	767
織 田 文 庫	562	0	562	325	0	325
文 庫 ・ 新 書	8,221	721	8,942	0	0	0
合 計	77,724	5,850	83,574	25,068	3,470	28,538

入学試験 (1997年度)

選抜方法	試 験 日	志 願 者	合 格 者	入 学 者
帰 国 子 女	10月5日	68(32)	11(5)	9(4)
特 別 選 抜	11月24日	97(16)	50(5)	48(5)
指 定 校 推 薦	1月19日	83(45)	83(45)	83(45)
外 国 学 生	1月20日	20(9)	2(1)	2(1)
早 実 推 薦	1月23日	30(0)	30(0)	30(0)
早 高 推 薦	1月23日	15(0)	15(0)	15(0)
学 院 推 薦	2月20日	2(0)	2(0)	2(0)
本 庄 推 薦	2月20日	5(0)	5(0)	5(0)
一 般 入 試	2月27日	5190(2115)	722(396)	435(239)
	合計 (女子)	5510(2225)	920(456)	629(298)

学部入学定員は500 [基礎 (100)、健康(160)、スポーツ(240)] である。

一般入試入学志願者数

年度	1987	1988	1989	1990	1991	1992	1993	1994	1995	1996	1997
全体	8353	7671	6990	7172	7751	7687	6852	6143	6099	5738	5190
(女子)	(1964)	(2137)	(2115)	(2356)	(2684)	(2653)	(2665)	(2482)	(2445)	(2429)	(2115)

早稲田大学 人間科学部

1996年度までのカリキュラム

一般教育科目

教養演習	人文科学系	社会科学系	自然科学系
教養演習	教育学(4) 宗教学(4) 哲学(4) 倫理学(4) 文学(4) 比較文明論(4) 映像論(4)	日本文化史(4) 法学(憲法を含む)(4) 社会変動論(4) ヨーロッパ文化概論(4) 教育法(4) 経済学(4) 文化人類学(4)	物理学(4) 化学(4) 生態系科学(4) 基礎数学(4) 生命科学論(4) 行動学(4) 人類学(自然)(4)

外国語科目

保健体育科目 基礎教育科目

必修外国語	選択外国語		スポーツ実習(2) スポーツ理論(2)	人間の諸問題(総合講座)(4) 環境論(総合講座)(4) バイオエシックス(4) 人間の構造と機能(4) 情報処理 (コンピュータ基礎・実習)(4)
英語Ⅰイ・ロ(2) 英語Ⅱ(2)	独語Ⅰイ・ロⅡ 独語Ⅱイ・ロ(2) 仏語Ⅰイ・ロ(2) 仏語Ⅱイ・ロⅡ 中国語Ⅰイ・ロ(2) 中国語Ⅱイ・ロ(2)	露語Ⅰイ・ロⅡ 露語Ⅱイ・ロ(2) スペイン語Ⅰイ・ロ(2) スペイン語Ⅱイ・ロ(2)		

専門教育科目

各学科共通 必修科目	人間基礎科学科 必修科目	人間健康科学科 必修科目	スポーツ科学科 必修科目	随意科目
人間発達の心理学(2) 人間発達の社会学(2) 人間発達の生命科学(2) 人間発達の スポーツ科学(2) 人間発達の行動学(2)	生物学概論(2) 行動学概論(2) 心理学概論(2) 社会学概論(2) 社会生命科学(2) 統計学概論(2) 演習Ⅰ・Ⅱ(4) 卒業論文(8)	福祉援助論(2) 地域福祉論(2) 臨床心理学(2) 人間関係Ⅰ(2) 人間関係Ⅱ(2) 精神身体医学Ⅱ(2) 環境心理学Ⅱ(2) 運動・保健概論(2) レクリエーション論(2) 演習Ⅰ・Ⅱ(4) 卒業論文(8)	スポーツ科学概論(4) スポーツ社会学(2) スポーツ情報論(2) スポーツ文化論(2) スポーツ経営学(2) スポーツ心理学(2) バイオメカニクス(2) 体力トレーニング論(2) 演習Ⅰ(4) 演習ⅡA・ⅡB(2) 卒業論文(8)	上級英語Ⅰ・Ⅱ(2) 上級独語Ⅰ・Ⅱ(2) 上級仏語Ⅰ・Ⅱ(2) 東洋医学の人間科学(4) 分子神経生物学(8) ジェロントロジー 〈長寿社会の人間学〉(2)
選択科目	選択科目	選択科目	選択科目	
哲学的人間学Ⅰ・Ⅱ(2) 言語・記号論(2) 民族文化論(2) 認知理論(2) 人格心理学(2) 教育心理学Ⅰ(2) 運動心理学(2) 社会心理学(2) 保健社会学(2) 人間工学Ⅰ(2) 脳神経科学(2) 精神医学Ⅰ・Ⅱ(2) 精神衛生概論(2) 精神身体医学Ⅰ(2) 栄養学Ⅰ(2) スポーツ医学Ⅰ・Ⅱ(2) 救急医学Ⅰ・Ⅱ(2) 画像医学Ⅰ・Ⅱ(2) 運動処方論(2) コミュニティ・ スポーツ論(2) 職場体育論(2)	細胞学・発生学及び実習(3) 神経内分泌学及び実習(3) 分子生物学及び実習(3) 遺伝学及び実習(3) 脳神経科学及び実習(3) 情報生理学及び実習(3) 生態学及び実習(3) 薬理学及び実習(3) 自然人類学(2) 比較行動学(2) 薬物作用学概論(2) 行動学研究法及び実習(3) 心理学研究法及び実習(3) 心理学的測定法及び実習(3) 生理心理学(2) 認知行動理論(2) 非言語行動論(2) 認知発達理論(2) 動機づけ理論(2) 家族社会学及び実習Ⅰ・Ⅱ(3) 村落社会学及び実習Ⅰ・Ⅱ(3) 都市社会学及び実習Ⅰ・Ⅱ(3) 社会学理論史(2) 社会集団論Ⅰ・Ⅱ(2) 社会福祉論Ⅰ・Ⅱ(2) 社会病理学(2) 人口学Ⅰ・Ⅱ(2) 特論Ⅰ・Ⅱ(2)	産業・職業社会学(4) 生活構造論Ⅰ・Ⅱ(2) 社会運動論Ⅱ 社会意識論(2) 社会調査法Ⅰ・Ⅱ(2) 社会開発論(2) コミュニケーション論(2) 余暇論(2) 教育心理学Ⅱ(2) 環境心理学Ⅰ(2) 造形心理学(2) 組織心理学(2) 人間行動と環境(医)Ⅰ・Ⅱ(2) 心理検査法Ⅰ・Ⅱ(2) 行動検査法(2) 行動療法Ⅰ・Ⅱ(2) 心理療法Ⅰ・Ⅱ(2) 学校カウンセリング(2) 比較文化論(2) 栄養学Ⅱ(2) 人間工学Ⅱ(2) 特論Ⅲ・Ⅳ(2)	社会構造論(2) コミュニティ論(2) スポーツ法学(2) スポーツ行政論(2) 公衆衛生学(2) 生理学(2) 衛生学(2) 運動生理学(2) 身体形態学 (解剖を含む)(2) リハビリテーション(2) 音楽理論・実習(2) 学校保健(2) スポーツ工学Ⅰ・Ⅱ(2)* スポーツ方法論・実習* Ⅰ・Ⅱ(2) スポーツ特論・実習(1) スポーツ史(2) コーチング論(2) 測定評価論(2) 測定評価演習(2) 武道概論(2) ダンス概論(2) 社会調査Ⅰ・Ⅱ(2) 原書講読演習(2)	*スポーツ方法論・実習Ⅰは、レスリング、筋力トレーニング、体操、器械運動、陸上、バレーボール、バスケットボール、ラグビー、サッカー、剣道、柔道、ダンス、水泳、卓球、ソフトボール、バドミントン、ニュースポーツ、硬式テニス、軟式テニス、スキー、スケートの21科目 スポーツ方法論・実習Ⅱは、バスケットボール、バレーボール、サッカー、柔道、剣道、器械運動、陸上の7科目 スポーツ特論・実習は、水泳、ウェイトリフティング、体操競技、陸上競技、柔道、剣道、レスリング、ボクシング、野球、ソフトボール、テニス、軟式テニス、卓球、バドミントン、バレーボール、バスケットボール、ラグビー、サッカー、スキー、スケートの20科目

1997年度からのカリキュラム

学部指定科目

総合講座	コミュニケーション				卒業研究
人間科学Ⅰ(2) [欲望][死] [道具][遊び] 人間科学Ⅱ(2) [狭山の森][ことば] [エシックス][差別]	英語Ⅰイ・ロ(2) 英語Ⅱ(2)	独語Ⅰイ・ロ(2) 独語Ⅱイ・ロ(2) 仏語Ⅰイ・ロ(2) 仏語Ⅱイ・ロ(2) 中国語Ⅰイ・ロ(2) 中国語Ⅱイ・ロ(2)	露語Ⅰイ・ロ(2) 露語Ⅱイ・ロ(2) スペイン語Ⅰイ・ロ(2) スペイン語Ⅱイ・ロ(2)	情報処理Ⅰ(2) 情報処理Ⅱ(2) 情報処理ⅢA(2) 情報処理ⅢB(2) 情報処理ⅢC(2) 情報処理ⅢD(2) 情報処理ⅢE(2)	卒業研究Ⅷ

学科指定科目

人間基礎科学科	人間健康科学科	スポーツ科学科	自由科目
人間基礎科学ⅠA・B(4) 人間基礎科学実習(4) 人間基礎科学Ⅱ(4) 統計学(4) 演習(4) 生物学実習(3) 細胞組織学実習(3) 神経内分泌学実習(3) 神経生理学実習(3) 遺伝学実習(3) 薬理学実習(3) 分子細胞生物学実習(3) 生態学実習(3) 心理学研究法実習Ⅰ・Ⅱ(3) 地域人口学実習Ⅰ・Ⅱ(3) 村落社会学実習Ⅰ・Ⅱ(3) 家族社会学実習Ⅰ・Ⅱ(3) 都市社会学実習Ⅰ・Ⅱ(3)	基礎講義(4) 統計学Ⅰ(2) 統計学Ⅱ(2) 演習(4) 環境行動分析(2) 人間機能の計測(2) 心理学的測定法(2) 心理検査法(2) 行動検査法(2) 事例研究法(2) プロトコル分析(2) デザインの評価と分析(2) ビジュアルイメージ・音響分析(2) 集団過程分析(2) フィールドワーク論Ⅰ・Ⅱ(2) 感覚・イメージ分析(2) 環境認知論(2) 教育デザイン論(2) 環境・行動論(2) 人間と環境(2) 人間と社会(2) 心と健康(2) 人間工学(2) 地域福祉論(2) レクリエーション論(2) 日本文化研究(2) 異文化研究(2) 比較社会論(2) 健康心理学(2) 認知行動療法(2) 学校カウンセリング(2) 分析的心理療法(2) 臨床バイオエシックス(2) 人間行動と安全(2) バーチャルリアリティ(2) 特殊環境情報論(2) マルチメディアインターフェース(2) Intercultural Communication (2)	スポーツ科学概論Ⅰ(2) スポーツ科学概論Ⅱ(2) 演習Ⅰ(1) 演習ⅡA(2) 演習ⅡB スポーツ方法実習Ⅰ・Ⅱ*(2) 体力トレーニング論(2) 測定評価論(2) コーチング論(2) スポーツ社会学(2) スポーツ法学(2) スポーツ文化論(2) スポーツ経営学(2) バイオメカニクス(2) スポーツ医学(2) スポーツ生理学(2) スポーツ心理学(2) スポーツ技術論 測定評価演習(2) 文献講読演習(2) スポーツ特論・実習(2)* 音楽理論・実習(2) アスレチックコンディショニング論・実習(2)	上級英語Ⅰ・Ⅱ(2) 上級独語Ⅰ・Ⅱ(2) 上級仏語Ⅰ・Ⅱ(2) 東洋医学の人間科学(4) 分子神経生物学(8) ジェロントロジー(2) *スポーツ方法実習Ⅰは、1996年度までと同様に21科目 スポーツ方法実習Ⅱは、1996年度までの科目に水泳、体操、ダンスを加えた10科目 スポーツ技術論は、陸上競技系、水泳競技系、体操系、球技系Ⅰ、球技系Ⅱ、球技系Ⅲ、格技系、野外運動系、水泳の8科目 スポーツ特論・実習は、1996年度までの科目からボクシングを除いた19科目

人間科学テーマ科目

Human Science Today	心と行動	記号と情報	身体と表現	スポーツと現代社会	体力とスポーツ技術
現代の宗教(2) 臓器移植(2) オリンピック(2) 子どもと現在(2)	脳神経科学(2) 精神生理学(2) 神経行動学(2) 行動学概論(2) 比較行動学(2) 発達行動学(2) 人間行動と環境(2) 動機づけ理論(2) 非言語行動論(2) 認知心理学(2) エルゴノミクス(基礎)(2) エルゴノミクス(応用)(2)	システム論(2) シンボルシステム論(2) 言語・記号論(2) 視覚言語論(2) 造形心理学(2) コミュニケーション論(2) マスメディア論(2) 学習とメディア(2) ジャーナリズム研究(2) 政治学(2) 経済学(2)	芸術論(2) 文学(2) 音楽(2) 美術史(2) 表現史(2) 演劇(2) 映像論(2) 舞踏論(2) 武道論(2) 遊戯論(2) 環境芸術(2)	生涯スポーツ論(2) コミュニティスポーツ論(2) スポーツ環境論(2) スポーツ教育論(2) スポーツ行政論(2) スポーツ情報論(2) スポーツ産業論(2) スポーツマーケティング論(2) 社会調査法(2) 民族スポーツ調査法(2)	人体の構造(2) 身体形態学 (解剖を含む)(2) スポーツ栄養学(2) メンタルトレーニング論(2) スポーツ工学(2) 運動学(2) 運動制御論(2) 運動処方論(2) スポーツ実習Ⅰ(2) スポーツ実習Ⅱ(2)

生命と進化	人間形成と適応	社会と環境	生活と福祉	文化と歴史	保健と医療
生物学概論(2) 数学(2) 化学(2) 物理学(2) 細胞組織学(2) 生理学(2) 内分泌学(2) 免疫学(2) 発生生物学(2) 遺伝学(2) 生化学(2) 薬理学(2) 分子細胞生物学(2) 放射能生物学(2) 進化学(2) 自然人類学(2) 放射能生物学実習(3)	哲学(2) 倫理学(2) バイオエシックス(2) 教育学(2) 教育制度論(2) 教育環境論(2) 教授学習過程論(2) ライフコース論(2) 教育心理学(2) 発達心理学(2) 認知行動理論(2) エゴアイデンティティ(2) イメージ自己体験法(2) 臨床心理学(2) 行動療法(2) 性の生物学(2) 性の心理学(2) 性教育(2)	生態系科学(2) 動物生態学(2) 環境史(2) 人口学(2) 社会変動論(2) 都市社会学(2) 社会集団論(2) 公共政策論(2) 社会調査論(2) 社会意識論(2) 生態心理学(2) 人間関係論(2) 対人行動論(2) 組織心理学(2) 社会心理学(2) 空間の心理学(2) 環境色彩論(2) 環境生理学(2)	社会福祉論(2) 福祉原論(2) 比較福祉論(2) 生涯教育論(2) 家族社会学(2) 高齢社会学(2) 老年心理学(2) 看護学(2) リハビリテーション(2) 法学(2) 憲法(2) 産業・職業社会学(2) 余暇論(2) セラピューティックレクリエーション論(2) 職場体育論(2) 観光レクリエーション論(2)	文化心理学(2) ジェンダー論(2) 臨床と文化(2) 考古学(2) 先史学(2) 日本民俗学(2) 宗教学(2) 文化人類学(2) 社会開発論(2) 比較文化論(2) アジア文化論(2) イスラム社会学(2) エジプト文明論(2) ヨーロッパ文化論(2) スポーツ史(2) 武道文化論(2) 科学史(2)	基礎栄養学(2) 衛生学(2) 公衆衛生学(2) 学校保健(2) 精神保健概論(2) 心身医学(2) 精神医学(2) 画像医学(2) 救急医学(2) 救急処置法(2) 臨床スポーツ医学(2) 保健社会学(2) 医療人類学(2)

資料(5)

人間科学の教育—現状と課題

常磐大学人間科学部学部長 安田 健次郎

諸大学における人間科学関係の学科、学部の設立の趣旨或は教育・研究の方針の基本には人間の本質を探る、全体として人間像を改めて学問の対象として正面に置く、伝統的個別科学の統合化ではなくそれぞれの個別性を尊重しつつ個別性の中からこぼれ落ちる問題にも注意を払い、課題によっては「総合的」取組を行なう、それぞれの個別専門を持ちながらその周辺領域との間を繋いでいく等の説明が見られます。また、学際的とはタテ割りの学問分野をお互いに繋げながら、ある目的の為に知識の再編成をする方法論であり、このような知識のシステム工学の様なものを総合の方法論としてやっていく事であるともいわれます。いずれにしても、科学的思考力法を導入して人間の本性を追求しようという意味と理解されます。

昭和10年頃、Denmark の物理学者 Niels Henrik David Bohr(1885~1962、1922年ノーベル物理学賞受賞) が理化学研究所を訪れた折りに、「物理学は究極において人間の生命の問題と結合しなければならない」と言ったといわれます。この事に刺激されて、戦後、物理学、工学、医学等の分野の一部の有識者が「生命のしくみ」という同好会を持って分子生物学、生態学、生理学、大脳生理学、精神神経科学、遺伝子工学等を論じました。ここまでは純粋に自然科学系の話題が主でありました。やがて生存という問題は決して自然科学だけの領域ではなく、広く人文科学、社会科学の面も密接に関与してくるとの理解から「生存科学研究会」が生まれました。そこでは「人の生存を身体的には生理的な機能と形態的な構成とに分けて見る考え方がある。社会的にみると機能面では経済学が大きく関与し、行政には法律が秩序として関与している。経済も機能としてだけではなく、経済秩序というものがあり、法律と結んで一つのメカニズムが成り立っている。すなわち、社会においても、機能と形態とは離すことの出来ない形になっている」という観点に立って種々の問題を論じていたといわれます。それらは、環境問題であり、人口問題であり、社会の最小単位である家の問題であり、医療経済の問題であり、医療資源開発の問題等つねに未来に向けての研究会でありました。このような社会機能から逆に生存を考えるのも、また、既存の科学がどういう意味を持つかをいろいろな面から検討し共通の要素を掘り下げて行くのも一つの生き方であると記載されています。昭和47年には「ライフサイエンス学会」が Basel で行なわれましたが、ここに言う、ライフサイエンスは遺伝子を中心としたミクロのいわゆる生命科学ではなく、まさに学際的な、総合性を持った人間の科学としての生命の科学であったと言われております。

私個人は人間科学の教育を受けた者ではなく、自分の理解の為に前記の様に幾つかの説明を引用させて頂きました。やはり焦点は総合と学際の中身が主でありましょう。或は人間を総合

的に理解するためにも学際的分野の解明が必要となっていると解する事も出来ましょう。人間の本性を解明しようとする多方面からの努力がある中でこの上記の記載の前半は所謂文化系からの総合の発想であり、後半は所謂理科系からのそれでありましょう。発想の経過は異なりますが、いずれも、その動機は、目まぐるしい社会の発展、諸技術の進歩等に対して既存の諸科学からは解決出来ない事項が多くなって来ているとの危機感、学問の進展による専門の細分化と尖鋭化により横断的に諸事項の大局を見渡して判断する視野に欠け、その結果人間の営みを見る場合でも近視眼的になりがちであり、背景にある人間の本性を見失っている等の観点からでありました。

さて、人間科学の焦点が総合的見地と学際的分野の開発・探究にある事を総論的にはやや理解出来たとしても、さて、教育・研究においてその総論的理解をどの様に反映させて各論的な実施計画にまでもって行ったら宜しいのでありましょうか。

本学は開学以来14年を経ました。この間、従来の意味の専門を持つ教員が人間科学の趣旨を帯して人間の本質を理解させ将来の科学の発展に寄与出来ることを念願しながら教育に携わってきました。この間、発足当時のカリキュラムを二回にわたって改編し特異なものに育ててきました。そしてその効果の表われ方を辛抱強く見守っているところです。また、人間の営みや学問を総合的に理解する見地からは、おそらく既存の学問の体系から離れていきなり新機軸を打ち出すよりは、従来の学問の総論的部分と最近の発展の要点等を複数の領域にわたって解説しそこから知識の総合を促す事をもう一度考えてはどうかとの考え方もあります。それについても、この種の学科の発足時に出された『大学のカリキュラムの編成上の単なる「新しいファッション」に終らせる事は学問の進歩どころか逆に退歩に繋がる』との警句を真剣に受け止めなければならないと思っております。

大学院は発足してから4年以上が経過しました。修士課程および博士課程の学生が学んで居ります。ここでも、人間科学の研究とはどのようなものであるべきなのでしょう。特に定義はなくそれぞれに工夫していく段階にあると思われれます。研究主題の選択は全く自由ですが設備の関係上自ら限界があります。旧来の学問の分野の様に基本に一定の方向性がある場合とは異なり、極端に言えば、何を研究しても宜しいという事になり、かえって絞り難い面もあります。所謂学科間分野の認識と育成と、人間科学の研究方法の開発、従来の専門分野との関係の明確化、独自の学会活動等も考えるべき事項でありましょう。

資料(6)

第三回フォーラム「人間科学を考える」報告

「人間学概論A」講義の経験から

札幌学院大学 中野 徹 三

[参 考 資 料]

- 1、『人間学概論A講義要綱』
- 2、人文学部設立趣意書及び人間科学科当初と現行カリキュラム
- 3、对学生配布資料の一部
- 4、人文学部創立10周年記念「人間科学に関するシンポジウム報告書」

[報 告 項 目]

- I、本学部 人間科学科設立までの歩みから
- II、「人間学概論A」を担当して
- III、今後の改革と展開のために

I 本学部 人間科学科設立までの歩みから

「人間と人間生活の諸条件に関する新たな問題状況の発生にともない、人間と人間社会・文化に対するこれまでの細分化され、断片化されたアプローチの限界性が強く意識されつつある現在、真に人間尊重の立場に立つ総合的な人間の科学とそれにもとづく教育システムの創造は、現代に生きる人文系・社会系諸科学研究者の共同の責務である」(「設立趣意書」から)

a わが国で3番目の「人間科学科」開設の歴史的諸前提

- 1、人間生活の総体的危機—総体的性格の自覚
→これまでの社会・人文諸科学の「断片性」への不満
- 2、本学における「一般教育」対「専門教育」問題の解決の必要
→全学の一般教育の主担当学部であり、同時にそれ自身ひとつの専門学部である人文学部の創立へ
- 3、札幌商科大学と札幌短期大学の比較的豊かな一般教育、スタッフの存在
→両大学統合による人間科学科創設へ
スタッフ構成の特質

b 人間学概論A・Bと3コース制—科目構成の特徴と学生の動向

表 I 過去6年間の志願者・合格者・入学者の推移

学科	年度	定員	志願者数	合格者数	入学者数
人間科学科	1990	100	998(社1)	244	157
	1991	100	1,623(社1、外1)	203(社1、外1)	125(社1、外1)
	1992	150	1,639(社3)	282(社3)	155(社2)
	1993	150	1,726(社13、外1)	338(社8)	197(社5)
	1994	150	1,711(社5、外3)	330(社5、外2)	180(社4、外2)
	1997	150	1,505(社8)	336(社8)	148(社6)

c 学科における「統合」と「分化」の問題

II 「人間学概論A」を担当して

a 授業構成のIdeeとその具体化

「人間学概論A」は、人間科学科に進学した学生諸君に、2年次以降、どのコースに進むかにかかわらず、21世紀に向けて生きるべき現代の人間のひとりとして、さらにこの時代に人間諸科学を学び、探求しようとする青年として、最小限必要と思われる人間と人間研究についての総合的知見の基礎を一年間を通じて提供しようとするものである。」(講義要綱から)

3部構成とその目標

- (I) 人間観と人間科学の歩み
- (II) 人間とはなにか—人間学基礎論
- (III) 現代の人間が直面している諸問題

b 目標の大きさと時間の不足、担当者の力量のはざままで

最大の問題—学科の諸科目、一般教育の諸科目と「人間学概論A」との関係が構築されて

c いないこと

d 各部の重点と学生の受けとめかた

第Ⅲ部から始め、それから第Ⅰ部、第Ⅱ部の順で

(Ⅲ) 80年代までの冷戦・「核の冬」の強調から、人口・環境・資源問題へ→学生の反応、かなり大きい

「環境」など、ひとつの問題を調べてレポートや中間テストの答案へ。日常生活の実践とどう結びつけるか。

(Ⅰ) 人間観の発展史、「人間の発見」から、近代的人権の自覚へ、19世紀から20世紀へ思想・文化・宗教などに関心ある学生が比較的多く、積極的に受けとめてくれる。疎外、ニーチェ、ファシズムと実存主義などに関心。アイヌ、在日朝鮮人、戦争などで外部講師を招く。

しかし、世界史の教養ない学生もかなり多く、困難あり。

(Ⅱ) 人間学基礎論

「ヒト化」、コトバ、脳と心などに強い興味、しかし時間の不足。内容の展開が不十分。現代人と現代の人間観まで到らず。

(学生の反応)「全体が見通せてよかった」から「広すぎる」、「駆け足で速すぎる」、「興味を持たないところが多い」まで、多様。

Ⅲ 今後の改革と展開のために

1 「人間学」がカバーすべき範囲の問題。

私は、以上の3分野は「人間学概論」である限り、基本的には不可欠である、と考える。しかし、1コマ1年間でカバーするには、やはり範囲が広すぎ、説明が不足となり、また担当者個人の力量をはるかに越える。——自分の勉強にはおおいになるが。

それで、今後は、「人間学概論A・B」を新たに内容面で検討して、有機的に統合・再編成し、複数のスタッフで担う必要がある。

2 他の講義との相関のなかで

特に、Ⅱ、Ⅲは全学の一般教育（「全学共通教育」）の再編・改革を通じて、そちらにかなり移行させることも可能であり、必要である、と思う。

それによって全学部の学生に、人間科学の成果を一他学部の教員の、各自の専門を突き抜けての参加をあわせて組織しつつ—教授するとともに、人間科学科学生には、全学共通科

目として展開された諸科目から、独自の立場で履修の指定を行い、専門科目として認定する道も可能である。(一般教育改革についての私の提言、参照)

さらに、人間科学科の専門科目としての人文諸科学の科目群、他学部を含めての社会諸科学の科目群との連関がないことが最大の問題である。特殊な科目としての「人間学概論」科目群と、他の諸科目との非有機的併存。

この点の改革のためには、改めて、現代世界における人間の諸状況とその基本的動向について、そしてこの状況を深く研究し、そこに生きる人間に真に有効な指針を与える人間諸科学の諸課題の総体を明らかにする。本学科の「世紀の転換点に立って」の基本理念と教育システムの新たな構築がめざされるべきであろう。

実践的な諸分野の知見と技術、そしてそこに生き、貫く人間についての深い原理的洞察と人間感性の養成。

3 人間諸科学と「人間学」の間

常盤大学の諸先生は、人間に関する諸科学の「寄せ集め」でなく、独自の科学としての「人間科学」(Human Science)を構想されており、またマルクスは、成年期の著作『経済学・哲学草稿』(1844年)において、「人間についての科学 (die Wissenschaft von Menschen)」が自然科学を自分のうちに包みこむのと同様に、自然科学は後々には人間についての科学を包み込むであろう。それは一つの科学となるであろう」と記した。これについてはさまざまな見解があろうが、諸科学がいま根本的な協働と「総合」の過程に入りつつあり、また入ることを要請されていることは、明らかである。(「モダン」から「ポスト・モダン」へ、「複雑系」の研究等々)。

そのためには、「人間諸科学」(ここではさしあたり、いわゆる人文・社会諸科学と、人間を対象とする自然諸科学の総体として把握される)の研究者は、それぞれが自己の専門領域を大胆に超越して自己を投企(Projeter)せねばならず、この仕事は同時に諸科学のうちで自己の「守備範囲」を改めて現代の学問的営為のうちに再定位する学問的活動であり、この投企はかくして新たな学の Projet となりうるし、この作業は、自由な学問的共同体との形成となる。

そしてその際、私見によれば、この「人間諸科学」の諸成果を原理的に統合しうる「人間学」の構築が不可欠である。こうした努力は、様々な角度から続けられているが、それはもとより「哲学的人間学」の世界に尽きない。(本学『人文学会紀要』第60号、97年3月参照。水島恵一氏の「人間性心理学」にもとづく「人間学」、春木豊氏の人間科学論とその総合原理としての「行動」、生田邦夫氏の、上智大学のキリスト教的人間形成をふまえた人間学の構想、わが国の「自然科学主義的に一元化された『人間科学』」を批判的に取りあげた奥谷浩一氏の見解 etc) 問題は、こういう努力が、まだ「人間諸科学」の研究者

共同の作業になっていないことにある。

こうした理論的統合の営為なしに、「人間諸科学」は、再び「諸科学」のカオス的分散化の道をたどるのみ、となり「人間学」は、貧しい「個別科学」にとどまるであろう。この仕事は、わが国の人間科学研究者の共同の中心課題のひとつではないであろうか？

4 「人間学」の展開のためのいくつかの基本問題

- a 「人間」を総体的に把握する「場」と「基礎カテゴリー」をどこに見出すか。

私自身は、「人間の存在とは、彼らの現実的生活過程(Lebensprozess)のことである」という命題をふまえて、それを人間と彼らの生活諸活動の総体としての「生活過程」に見出そうとしている。(講義要綱 p.77 —79)この場合、個別諸科学と人間学を媒介する「概論」科目との関係の有機化の必要。ゲーレンの「行為する存在」、フッサールの「生活世界」(Lebenswelt)、ウェーバー、パーソンズ、A・シュッツなどの行為論の評価。

- b 意識ないし「精神」と物質的世界の現実的統合の地点としての心身論。脳科学と精神科学。

- c 還元主義と超越の間。

「複雑系」の理論—「存在から生成」へ、カオスから構造への「自己組織化」(プリゴジン)の不可逆的過程は、人間科学とどうかかわるのか、等。

○ヨーロッパ近現代における還元主義的傾向と反還元主義的傾向の交錯図

	(近代初期)	(18世紀)	(19世紀)	(20世紀)	(世紀末)
デカルト	ガリレイ・ニュートン革命 (量化的決定論 時間の可逆性)	啓蒙期の 自然哲学	→ 19世紀の自然哲学主義 ダーウイン主義 (自然史の発展) 熱力学の法則(エントロピー増大の不可逆性) (マルクス主義) 近代歴史学、ニーチェ	→ フロイト、行動心理学 社会諸科学	脳科学、情報科学 認知心理学、環境科学 ※「複雑系」の理論 哲学的人間学、構造主義 実存主義、ポスト構造主義
	ヴァーゴの「新しい学」	→ ドイツ古典哲学		ベルグソン、フッサール現象学 (「生の飛躍」)	

文化は人間が作ったものであるから、真なるものとして理解できるとする。
(*verum et factum convertuntur*)

「伝統的に自然科学は全称命題を扱い、人文科学は特称命題を扱ってきた。自然科学と人文科学が収束しつつあることを強調して、本書のフランス語版の表題は『新しい同盟』とつけた。
(プリゴジン『混沌地から秩序を』)